

佐渡裕(指揮)/反田恭平(ピアノ) トーンキュンストラー管弦楽団 演奏会を聴く

2025年5月 本多幸吉

5月15日サントリー・ホールでの演奏会を聴いた。Tonkünstler (音の芸術家) 管弦楽団はウィーンの名前は冠していない。ニーダーエースタライヒ(Lower Austria)州の楽団で州都ザンクト・ペルテン、ウィーン郊外のグラフェネッツおよびウィーンの楽友協会ホールとの3つの拠点を持っており、「ウィーン風の音」を有する。[蛇足ながら、Lower Austriaと言っても北東部、地図の左上にある。LowerはEnns川下流ということ。上流地域はUpper Austriaで、州都は僕がよく出張したことのある、ブルックナーに縁のあるリンツ。] 楽団員入場前に佐渡裕による紹介スピーチがあったので要約する。「私がウィーンに最初に暮らしたのがバーンスタインのアシスタントだった1988年。」「この楽団の音楽監督は2015年からで、今年で10年の任期を終える。ウィーン拠点の楽団の音楽監督としては最長記録。」



楽友協会ホールでの
トーンキュンストラー管弦楽団

「今回の演奏会にはウィーンゆかりのモーツァルトとマーラーを選んだ。」「ウィーンは本当に音楽の都。自分の住まいの近くにモーツァルトが『フィガロの結婚』を作曲したアパートや、モーツァルトの終の住処となったアパートがあった。」「ウィーンホルンはフレンチ・ホルンと異なり、構造が独特。トタンペットもロータリー・トランペットというドイツ・オーストリア製を使用。ティンパニーの表面はアメリカの楽団ではプラスチック製だが、ドイツとオーストリアでは皮製だが、ウィーンのは厚い牛革でチューニングが難しい。弦楽器は、特殊構造ではないが奏法は独特のウィーン風。」「この楽団はウィーンでは楽友協会ホールで日曜の午後とウィークデイの夜に演奏している。楽友協会ホールでは、どんな演奏曲目でも良い響きが得られる。」「マーラーの交響曲第5番は第一楽章冒頭のタタ・ターはベートーベンの『運命』の冒頭に似ている。第四楽章は映画『ベニスに死す』で有名になった。全体の演奏時間は70分と長いので、途中で眠くなったら眠って結構です。」

今回の席は左側2階で、指揮者の真横、ピアノ奏者の背中を見る位置だった。全演奏者を見渡せ、眠くなるどころか、やや興奮気味に堪能できた。



反田恭平と佐渡裕

モーツァルト ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 (ピアノ独奏は反田恭平)

楽器構成はフレート、クラリネット、ファゴット、ホルン各2、弦五部。トランペットとティンパニーはない。

第一楽章 イ長調 アレグロ: 冒頭が同じイ長調の僕の好きなモーツァルトのクラリネット五重奏曲の冒頭と似ている。明快な協奏ソナタ形式。この曲の名演といわれるフリードリヒ・グルダの弾き方はゆったりしていたが、反田の演奏は更にゆっくりで、カデンツァ部分で、その印象が強かった。

第一楽章終了後、第二楽章にはいるまでの時間も随分長かった。

第二楽章 嬰へ短調 アダージョ: 嬰へ短調はモーツァルトには珍しい。

アダージョ指定もモーツァルトには珍しく、反田は「アダージョを置いた意味合いに関心がある」とのこと。ここもグルダ以上にゆっくりとした演奏だった。物思いに沈んだように静かで短い曲で、ピアノ協奏曲第22番の大規模な

短調第二楽章と異なる。

第三楽章 イ長調 アレグロ・アッサイ： ロンド形式。「モーツァルトの悲しみは疾走する」とのアンリ・ゲオンからの小林秀雄による引用を真似ると、「喜びが疾走」しているような軽快さで、次々とメロディーが流れる。

佐渡は、反田のピアノ演奏は音のもつ躍動感、濃厚さ、清涼感が浮き上がってくると言っている。

僕が以前聴いた、反田によるブラームスのピアノ協奏曲第二番では躍動感を、今回は清涼感を印象づけられた。

マーラー 交響曲第五番 嬰ハ短調

マーラーが作曲を始めたのが、アルマ・シントラーと出会う 1901 年、完成がアルマと結婚する 1902 年。第四楽章は、指揮者メンゲルベルクによれば、マーラーのアルマへのラブレターとのこと。最初にレコード録音されたのは、メンゲルベルク指揮による第四楽章だけだった、ということは、ヴィスコンティの映画『ベニスに死す』に使われて有名になる前から、第四楽章は特別なものだったのかも知れない。全曲録音は意外と遅く 1946 年で、マーラーの弟子ブルーノ・ワルター の指揮による。



マーラー とマーラーとの結婚前のアルマ・シントラー

葬送行進曲に始まり、楽しげなロンドーフィナーレで終わるこの曲はベートーベンの「苦悩から闘争を経て、勝利へ」の構造をほのめかす。

楽器構成： 100 名近い構成。管楽器の活躍が目立つ。オーボエ、クラリネット、ファゴット、トロンボーン各 3、ホルン 6、トランペット4、チューバ、ティンパニー、グロッケンシュピール、シンバル、大太鼓、小太鼓、タムタム、トライアングル、ホルツクラッパー(スラップスティック)、ハープ、弦5部。大音響に圧倒された。

[第一部]

第一楽章 嬰ハ短調： 冒頭の「タタタ・ターン」ベートーベンの運命の出だしに似ているが、むしろメンデスゾーン結婚行進曲の転用を感じさせる。

第二楽章 イ短調 嵐のように荒々しく、極めて激しく： 楽章終わりに金管の輝かしいコーラルが現れ、消え去る。

[第二部]

第三楽章 ニ長調 スケルツォ 力強く、速すぎずに： 一転して楽しげな楽想の、しかし複雑な「展開する」明滅感あふれるスケルツォ。

[第三部]

第四楽章 ヘ長調 アダージェット：弦楽器とハープだけで演奏。「愛の楽章」と呼ばれる。佐渡の師バーンスタインは、この楽章の表現方法を、佐渡の手に 10 分間触れることで深い精神性を伝えたという。日本の能の所作の応用とのことだ。

第五楽章： ニ長調 ロンド： 勝利を歓喜する。

日本経済新聞日曜版[名作コンシエルジュ]欄のクラシック音楽担当である鈴木淳史によれば、この曲の構成は、

| 第一楽章 | 第二楽章 | 第三楽章 | 第四楽章 | 第五楽章 |
|------|------------|--------------|-----------|------|
| 死 | 生死による思考の逡巡 | 生でも死でもない死の舞踏 | 愛による思考の逡巡 | 生 |

というシンメトリカルなブリッジ構造。

カラヤン指揮のベルリン・フィルの演奏は第四楽章を甘美に強調しすぎているが、今回の佐渡の指揮は全体にバランスがとれていたと思う。もっとも、佐渡も「第四楽章は全編を通じてあらゆる音楽的要素が要求される勝負曲中の勝負曲と思う」とは言っている。本曲の名演といわれるバーンスタイン指揮のウィーン・フィルの演奏が映像に残っているので、見てみた。小柄なバーンスタインは時に曲に自ら酔うような身振りがあるが、弟子である大柄な佐渡の指揮はより冷静に感じられた。

本楽団のレベルは、ウィーン・フィル、ウィーン交響楽団、ウィーン放送交響楽団の次とも言われていたが、120年の歴史を持ち、かのクナッパーツブッシュが首席指揮者をしていたこともあり、伝統ある楽団と言える。佐渡の就任時の客入りは6割程度だったが、演奏曲目の幅を広げ、今は立ち見のでも満員状態というから、佐渡の腕前と貢献はすごいと思う。

以上